

---



---

## 学内活動報告

---



---

順天堂大学保健看護学部 順天堂大学保健看護研究 5  
P.112-118 (2017)

# 韓国の看護大学における看護教育の体験

## An Overview of Nursing Education in Korea

### — Based on Teaching Experience at College of Nursing Konyang University

野村 志保子\*

NOMURA Shihoko

#### 要 旨

2014年5月～2015年2月の10ヶ月間、筆者は韓国の建陽大学校に招聘され、主として看護学生の「看護の基本」に関する看護技術の教育や臨床実習指導に関わった。また在任中は、看護学生の教育だけでなく、医学部や文系学部の学生の授業、病院看護師との勉強会などを通して、韓国の大学教育や病院における医療・看護の実情について多くのことを学んだ。

韓国の看護基礎教育は2012年から4年制大学へと一元化され、それに伴い教育の質の保証を図るための審査・認証制度が整い実施されている状況にある。また、韓国も急速な高齢化社会を迎えて医療制度や看護体制に新たな政策がうちだされ、医療の現場も徐々に変革している時期にある。

このような状況におかれている韓国の看護教育および医療の現場において、筆者は韓国の人々の温かい支援を受けながら多種多様な体験をしたが、本稿では、韓国の看護基礎教育の概要、筆者の建陽大学校における教育活動や病院看護師との交流、韓国での生活体験などについて報告する。

索引用語：韓国看護教育制度、国際交流、看護学生臨床実習、看護師

Key words：Korean Nursing education system, International exchange,  
Clinical practice of nursing students, Nurse

#### 1. はじめに

2014年5月～2015年2月の10ヶ月間、筆者は韓国の建陽大学校に招聘され、看護学部や医学部、創意融合学部の学生の教育を体験した。また、建陽大学校病院看護師の学習会や日本語勉強会などに参加して、韓国の病院における看護の実情を知る貴重な体験をした。筆者と建陽大学校との交流は、2009年に前任校で建陽大学校医科大学看護学科学生の短期留学を受け

入れたことが始まりだった。順天堂大学保健看護学部（以下、本学部）在職中の2011年に、第3回日中韓看護学会に参加した後、建陽大学校の看護学科学生主催の学術祭に招かれて講演<sup>1)</sup>、さらに2012年12月に本学部第1回国際交流講演会に建陽大学校から2名の教授を招いて開催した「韓国における看護教育制度」の講演会などを通して交流を続けている<sup>2)</sup>。

一方、順天堂大学の国際交流事業の一環として、2015年度から日韓看護師の交流が始まり、建陽大学校病院の看護師は、2015年および2016年に順天堂大学医学部附属病院の順天堂医院や順天堂東京江東高

\* 順天堂大学保健看護学部

\* *Juntendo University Faculty of Health Sciences and Nursing*

(Nov. 11, 2016 原稿受付) (Jan. 20, 2017 原稿受領)

齢者医療センター（以下、高齢者医療センター）において臨床研修、静岡病院で見学研修、本学部の施設見学などを行っている。

本稿では、韓国の看護基礎教育の概要、筆者の建陽大学校における教育活動や病院看護師との交流、韓国での生活体験などを報告する。

## II. 韓国の看護教育制度の概要

韓国の看護教育は1903年に始まり紆余曲折を経て、韓国の看護師育成の教育制度は1973年を基点に高等教育になり、3年制専門大学と4年制大学の2つのコースとなった。さらに、2011年の高等教育法改定により、2012年から看護基礎教育は4年制大学へと一元化された。3年制専門大学は4年制大学へと改組しており、2015年3月現在、大学は170校ある。第2次世界大戦後、韓国の看護教育は日本と同様に米国の看護教育の影響を受けながら発展してきたといわれ、1955年に初めて韓国に看護大学が設立されている。因みに日本における最初の看護大学設立は1952年である<sup>2)3)4)</sup>。

また、看護基礎教育が4年制に一元化されたとき、質の保証を図るために教育機関は5年ごとに認証評価を受けることが義務づけられた。審査・認証は国の省庁である保健福祉部から指定された韓国看護評価院が遂行し、認証されていない教育機関は新入生の受け入れや教育ができない。韓国看護評価院は、看護教育機関開設の認可や看護師育成の教育課程の規定等も担っている。教育課程の基準は、①教養25単位以上、②人文社会科学8単位以上、③専攻70～90単位、④選択科目の開設、⑤臨床実習1,000時間以上で履修単位は140単位以上となっている。看護学は基本看護学、看護管理学、母性看護学、児童看護学、精神看護学、成人看護学（老人特有の疾患含む）、地域社会看護学（老人保健含む）の7領域で構成されている。なお、看護師国家試験は、日本と同様に年に1回行わ

れ、2016年から問題数がやや減少して295問に改定されている。合格基準は全科目総点60%以上、各科目40%以上で、この10年間の平均合格率は94%前後である<sup>3)4)</sup>。

## III. 建陽大学校における教育活動および病院看護師との交流

### 1. 建陽大学校の概要

韓国では、多くの大学が総合大学を大学校、学部を大学とっている。建陽大学校には2つのキャンパスがあり、大田（テジョン）市と論山（ノンサン）市にある（大田市は、韓国では「大田広域市」というが、本稿では大田市と記す）。大田市は図1に示すように韓国の中央部に位置し、韓国では第5番目に大きい都市で、現在人口は160万人程である。建陽大学校は金熺洙（Hi Soo Kim）現総長が創立して1992年に総合大学になり、現在8学部、30の学科・専攻があり、学生数は8,300名余りである。看護学部は1994年に開設、筆者が就任中の2014年8月に医学部看護学

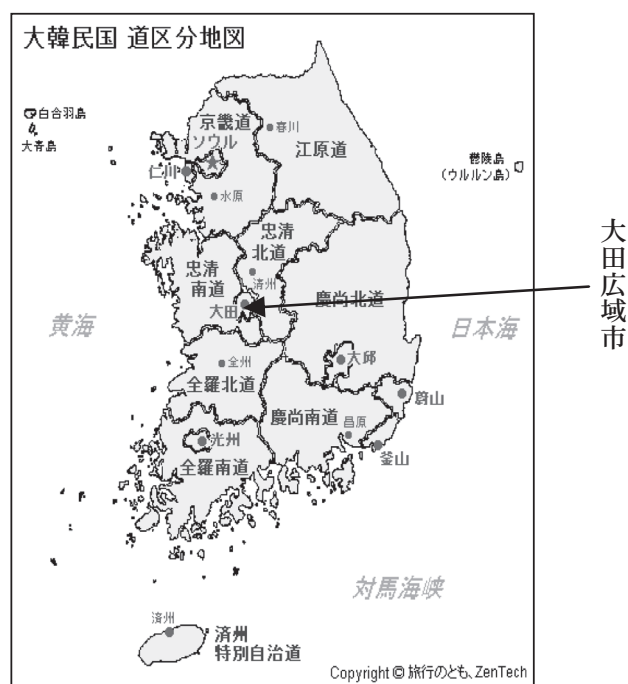


図1 韓国地図

科から看護学部になった。なお、建陽大学校は2013年11月の韓国中央日報に過去20年間で最も発展した大学として6位に発表され、2014年8月に国の教育部主観大型国策事業4部門に全て採択された唯一の大学でもあり近年発展が著しい。建陽大学校病院はベッド数800床余りで、2012年12月にJCI（国際医療機能評価機関）の認証を取得している。大田キャンパスには医学部や看護学部、作業療法科や放射線科などを設置する学部、病院等がある<sup>5)</sup>。

## 2. 建陽大学校における教育活動

筆者が建陽大学校に招聘されたのは、「看護学生や看護師に対する日本の病院で患者に実施しているベッドサイドの看護および患者や家族への接遇マナーなどの教育」が目的だった。主な教育活動は看護学部学生の教育だったが、医学部や論山キャンパスの授業、病院看護師の勉強会などにも関わらせていただいたので、これらの体験について述べる。

### 1) 建陽大学校看護学部教育課程の概要

韓国の多くの大学の学年暦は3月に新学期が始まり、翌年2月までの日程で組まれるといわれる。建陽大学校では前期は3月～6月、後期は8月下旬～12月に授業が行われ、入学式は3月初旬、卒業式は2月中旬で、新卒看護師の就職は3月からと日本より年度の始まりが1カ月ほど早い。因みに看護師国家試験は1月に実施されていた。

建陽大学校看護学部（以下、看護学部）の教育課程は、看護師国家試験受験資格の条件に関連するため前述した韓国看護評価医院が定めた基準に則って編成されている。ほとんどの科目が必修で選択科目は少なく、臨床実習は1,080時間、卒業要件単位は140単位以上である。看護学の科目および臨床実習の単位数は、日本の看護師課程とほぼ同じである。臨床実習は3年次の前期から始まり、4年次後期まで実施される。日本のように1～2年次に行われる基礎看護実習は行われ

ていない。筆者が2009年に初めて看護学部を訪れた時は1学年30数名だったが、徐々に増員され、韓国の看護基礎教育が4年制大学に一元化された2012年から、学生数は3年制専門大学からの編入生を含んで1学年140～150名になった。このような状況の中で3～4年生は2グループに分かれて臨床実習と授業を交替しながら実施していた。

## 2) 看護学部における教育活動

### (1) 講義と演習

筆者が就任した2014年5月は、3月から新学期が始まっていたこともあり、前期は2～4年次の学生に1～2回、当該学年の履修の状況に合わせたテーマについて講義した。後期は2年生の看護の基本について講義と演習（総授業時間数は74時間）、3年生のICU臨床実習を担当した。

#### ◇前期の講義

##### 1) 看護とは—経験を通して培った私の看護観—

##### 2) 日本の医療・看護の紹介

- (1) 日本における看護組織と機能、看護職者に求められる看護倫理
- (2) 日本における脳卒中患者の急性期・回復期における病院および地域でのリハビリテーション看護の現状
- (3) 糖尿病患者に対する患者教育の現状
- (4) 日本における高齢者の医療福祉

#### ◇後期の講義・演習

- 1) 身体の清潔、寝衣交換、体位変換、便器の当て方などの看護技術
- 2) ターミナルケア（ホスピスの看護含む）と臨終時の看護

筆者は韓国語が話せなかったため、10年近く交流がある論山キャンパスのK教授に通訳の支援を受けながら講義や演習を行った。韓国語の授業資料につい

ては、2回目の授業までは日本語の資料を全てK教授に韓国語に翻訳を依頼した。しかし、徐々に翻訳ソフトを有効活用したり、韓国語をパソコンで打つ練習をして韓国語の辞書を片手に韓国語で資料を作成できるようになった。毎日、研究室で夜遅くまでコンピュータ画面と向き合っていたが、辛いという思いはなく、70歳になって韓国語で授業資料を作成できる喜びの方が大きく、初めての異国での生活に光が見えて、心が充たされる日になっていった。もちろん作成後はK教授に点検していただいたが、教授の負担を少し軽減し、また印刷までの流れが円滑になって本当に嬉しかった。

また、前期の授業内容は筆者の専門外の分野の講義が多かったため、日本の看護制度や保健医療福祉制度に関わる歴史の変遷、これからの政策展望などを改めて系統立てて学ぶ機会になった。日本の友人から文献や現行制度の資料などを送ってもらい、韓国の制度と比較しながら授業内容を精選し整理していく作業は大変だったが新しい発見もあった。異国に来て自国の保健医療福祉に関わる政策について、歴史の変遷を辿りながら鳥瞰できたことは大きな収穫であった。

後期の授業で苦慮したことは、使用する物品の調達と時間割だった。物品の方は一部日本から調達したり、実習助手の支援もあって整備できた。時間割は前述した後期授業の1)と2)はそれぞれ1週間ずつ集中的に行われ、1週間に38時間という時間割が組まれていた。このような時間割は学生数に対して実習室が狭く、1学年を6つのグループに分けて授業を行わなければならないためであるが、多いときは1日8時間連続の授業もあった。幸いにも40年以上の教育経験で培った演習の展開方法が役に立ち、混乱なく無事に終えることができたときは安堵感で一杯だった。

授業に対する学生の反応は驚くほど大きく、前期の授業では日韓の現状を比較した的確な質問が多く、日本の看護教育、看護制度、医療福祉制度に対する関心

の深さを感じた。最初の講義の「看護とは一経験を通して培った私の看護観」には、建陽大学校総長と大学病院長が臨席して下さった。後日、病院長が筆者の講義について「学生が看護に夢を抱けるような話でしたね」、また学生に伝えたかった“看護のこころ”の内容について「新人看護師が病院に就職したとき、私も同じことを話します!」とおっしゃっていただいたときは、熱いものが胸に込み上げてきた。

看護技術のデモンストレーションの患者役を学生が快く引き受けてくれた。学生は経験しなかった授業ということもあってか、覗き込むような姿勢で筆者の動きを観察し、メモをとっていた。筆者が行う看護技術をみて学生が歓声をあげたり、その場で手つきを真似したりと反応が大きく、それに合わせて筆者も冗談を言ったり、一寸脱線したりと楽しい授業だった。学生は授業について率直に意見を述べ、質問も多く、日本の看護学生の教育に関わる質問もあった。

## (2) 臨床実習指導

韓国の多くの病院では看護師の主な業務は静脈注射や経管栄養、酸素吸入などのような治療処置で、身体の清潔や排泄、食事などに関わるベッドサイドケアを原則として行っていない。日本の病院で看護師が行っている患者の身の回りのケアは、患者が雇用した介護人や家族が実施していることが多い。ただ、最近では国の政策もあり、病院によっては徐々に看護師によるベッドサイドケアが行われつつあるといわれる。

このような病院の状況の中で、看護学生は患者の承諾を得ることが難しいこともあり、血圧や脈拍、体温を測定する以外は、患者に触れることもできず日本の看護学生のように直接患者にベッドサイドケアはできない。朝7時～15時の実習は、看護師の治療処置の見学やカンファレンスなどが主な実習内容だった。建陽大学校病院ではICUでのみベッドサイドケアが行われていたが、日本の病院のICUの患者の状態とは異なり、日本の一般病棟でみられるモニターを装着し



ている重症患者もICUに入室していた。

筆者はICUにおける実習指導を担当した。学生の各グループのICU実習は1日で、筆者に与えられた時間は1時間だった。師長に選んで頂いた患者に口腔ケアや体位変換、足浴などのケアを学生の前で実施することだった。これらのケアの物品は日本とは異なるものが多く、事前に確認してICUにあるものを活用した。ケアをする患者の承諾を得ることについては、看護部長や師長の尽力をいただき、ケアする筆者が“日本の看護師”であることを説明して同意を得た。6～7名の学生がベッドサイドに立っているの、学生と一緒にケアをするように働きかけると、“待ちました！”といわんばかりの嬉しそうな表情で積極的にケアを実施していた。患者のケアを終えた後、実施したケアについてカンファレンスを行ったが、穏やかな表情に変化する患者の反応などを良く観察しており、次々と発言される学生の豊かな感性に満ちたことばに毎回感動させられた。限られた短い実習時間をもう少し長くならないものかと看護学部の担当者に相談したが叶わなかった。近い将来、日本と同じように韓国の看護学生が臨床実習で患者のケアができるようになり、学生が“臨床実習が楽しい！”と思う日が来ることを願わずにはられない。

### 3) 看護学部以外の教育活動

医学部長、創意融合学部K教授はじめ多くの方々の尽力で看護学部以外の学生の授業にも関わらせていただいた。

医学部の1年生に、「日本語会話」(時間数 30 時間)の科目責任教授のアシスタントとして関わらせていただいた。この授業は、筆者の韓国語の勉強にもなり有意義だった。また、冬期休暇中に、医学部3・4年生の日本の病院における研修の計画立案や研修中のサポート(2週間)に関わらせていただき、貴重な体験をした。

論山キャンパスの創意融合学部のGlobal Frontier School専攻の2年生に「日本人の経済生活－消費者の生活の事例紹介－」(時間数6時間)について講義した。全くの専門外で、文献やインターネットや友人の子供の教育費などを情報収集して授業を組み立て、韓国との比較を課題として提議したりと稚拙な内容だったが、担当教授や学生の優しさに支えられて授業を終えることができた。日本文化専攻の学生であったため日本語で講義できたこと、また日本の企業に研修に行く前の発表会に参加して少し馴染んでいたこともあり、あまり緊張感もなく楽しい雰囲気の中で授業を進めることができた。この学部学生との交流は、韓国の医療関係以外の教育の一旦を直接見ることができたよい機会だった。

### 4) 学生の教育以外の活動

#### (1) 看護学部教員との交流

毎月開催される総長はじめ大学の幹部が出席する教授会に参加させていただいた。報告される内容を通して看護学部の教育方針や抱える課題、他大学の教育の実情の一旦を知る機会を与えられ感謝している。また、建陽大学校と日本の協定校の看護教育課程の「Dual Degree」の可能性という課題をいただき、筆者がこれまで関わった日本の看護大学の教育課程と比較検討した。教育進度や単位数、教育内容を詳細に調べて比較表を作成して両国の相違を検討した。調べて作成した資料は分厚いファイルになる位大変な作業であったが、韓国の教育課程に対する関心が大きかったので、課題をいただき有難かった。また、看護学部教員に「日本の看護基礎教育－教育課程、臨床実習－」に関する説明会も開催された。事前に全教員の研究室に資料を届けて読んで頂くようお願いしたこともあってか、意見交換は活発で、そのまま食事会に流れるという和気あいあいとした会になった。

#### (2) 建陽大学校病院看護師との交流

看護師や事務職員に、「患者・家族から求められる看護師の実践力と接遇マナー」について、2回講演した。また、10月～12月に看護部の日本語勉強会を担当した。勉強会は日本語が話せる卒業後1年目の若い看護師の支援を受けながら実施した。将来、日本の病院で研修したときに役立つように病院の標識や看護用語について漢字と韓国語の対になった資料や日常会話の事例を作り教材にした。この勉強会の進め方は、医学部の「日本語会話」の授業で教授のアシスタントを経験したことが役に立った。

さらに、看護部長の配慮で10月～11月に開催された全ての病棟の看護師の学習会に参加した。特に、学習会終了後に看護師と話し合う時間が設けられており、日本の病院における看護体制や看護師待遇、看護制度、患者とのコミュニケーションなど多岐にわたる質問を受けながら話し合う過程で、韓国の医療制度や病院における看護の実際について多くのことを学ばせていただいた。

### (3) その他の活動

- ①大田広域市地区「老人看護研究会」の役員をしている看護学部教授の依頼により、「日本における高齢者の医療福祉と看護」について講演した。韓国の介護保険や在宅医療が日本のものを参考にしていることもあって質問も多く、後日アンケートで質問に答えることになった。
- ②大学の教職員研修会、看護学部のオープンキャンパスや学生の保護者会、卒業式、様々な学生会主催行事にも参加した。オープンキャンパスは日本と同じように保護者と同伴する高校生が多かった。卒業式は全学部を3日間に分けて行われ、教員は出身大学のガウン、学生は大学が準備したガウンを着用していた。全教員は壇上にあがり所属する学部の学生が卒業証書を受け取った後、一人一人の学生に話しながら握手するという日本のような厳粛さはなくゆったりとした雰囲気の中で行われた卒業式だった。

- ③創意融合学部の高校校訪問に同行した。これはK教授の配慮によるもので、知らない市や町に出向くので観光を兼ねた高校訪問だった。ある高校に行ったとき、日本が好きで日本語を独学で覚えたという高校生が追いかけてきて、“生まれて初めて日本人と話した！”と日本語で嬉しそうに話しかけられるというハプニングもあった。

## IV. 韓国での暮らし

初めての異国での生活は期待と不安の入り混じったものだった。正直、思いもかけない事態にも遭遇したが、建陽大学校総長夫妻・ご家族はじめ交流があった教授や看護学部や他学部の教員、病院看護部の方々の心のこもった気遣いや支援により、穏やかな時間の中にも日本で仕事をしていた時とは異なる躍動感のある毎日を過ごすことができた。

宿舎は自炊ができるゲストルームを提供していただいた。韓国のマーケットは大型で、バックされた食品や日用品が大量で1人暮らしや車を運転ができない者には大変だったが、沢山の方々に助けられながら不自由なく生活できた。日本食の好きな韓国人が多く、日本ではあまり作らなかったカレーライスやぜんざいを作り、鍋ごと病院の看護部長室や看護学部へ運んだこともあった。多くの方々からキムチや、韓国のお盆やお正月に昔から作られているお餅や家庭料理などをいただいた。韓国のキムチは200種類近くあるようで、各家庭で味が異なっていた。韓国で食べるキムチはとても美味しいのに、頂いたキムチでも日本で食べると味がいま一つなのが不思議だった。保存のしかたもあると思うが、韓国の生活空間から醸し出される空気感の違いがキムチの味に影響しているのではないかと思ったりもした。白菜が収穫される季節に市場に行くと店頭でキムチに漬ける野菜が山積みされ、多種多様な香辛料が並んでいて壮観だった。旧正月前の市場の風景をみて、幼い頃母と行った日本の市場を思い出

し、何とも言えない郷愁を覚えた。日常、韓国で作られている料理や食品、可愛い小物などをいただくたびに、今まで知らなかった韓国の伝統や風習、生活習慣などを教えていただき、日本のものに似ていることが多いのに気づかされた。

筆者は70歳の誕生日を韓国で迎えた。この日は韓国の祭りで、10年来の交流があるK教授とH教授が、生け簀のある魚市場に行ってカレイと烏賊のお刺身を準備してくださった。大田キャンパスの裏山で語りあいながら韓国のお酒を酌み交わした宴は忘れられない古希のお祝いになった。

### おわりに

韓国は日本から1945年に独立後、既存の看護師養成を廃止し、日本と同様に米国の看護教育の影響を受けながら、看護教育の質的成長を図ってきた<sup>2)</sup>。現在、病院の看護体制も変革のときを迎えているように思う。帰国後、小川秀興理事長はじめ順天堂大学の多くの教職員の皆様のご指導とご尽力により、2015年から順天堂医院や高齢者医療センター、静岡病院において建陽大学校病院看護師の臨床研修が実施されている。筆者は10カ月間ではあったが、韓国で教育や生活を体

験してみて、このような体験をもっと若い世代の人々にしていただきたいと切実に感じた。今後は日韓看護師の交流だけでなく、看護学部の教員や看護学生の国際交流が行われることを祈念している。

### 引用・参考文献

- 1) 野村志保子：看護基礎教育の変革期を迎えた韓国を訪れて、順天堂保健看護研究、第1巻1号、87-90、2012.
- 2) 韓水正、金英順、野村志保子：韓国における看護教育制度、順天堂保健看護研究、第2巻1号、52-60、2013.
- 3) Keiko INATOMI, Shihoko NOMURA : Nursing Education in Korea-a Comparison with Nursing Education in Japan and the United States-, Juntendo Medical Journal, 62(5), 406-411, 2016.
- 4) 韓国の看護教育制度、看護師国家試：Korean Accreditation Board of Nursing Education, <http://www.kabone.or.kr/>
- 5) 建陽大学校の紹介：<http://www.konyang.ac.kr/jp.do>